高齢者疑似体験の実施にあたって

～貧困的な福祉観の植え付けになってないか～

和歌山県ボランティアセンター

■福祉教育

近年盛んに行われている福祉教育の福祉とは、「みんなが幸せに暮らす」ということです。

どのような立場・境遇にある人も皆が幸せになるために、それを実現する方法を考えようとすることが福祉教育です。誰にとっても老いはやってくるということからすれば、高齢者問題を学ぶということは未来の自分について考えること、人が生きていくということについて考えることにもなります。

■高齢者疑似体験セット

疑似体験装具を装着して、日常生活動作を擬似的に体験することにより、身体的特徴を理解し、高齢者の視点に立って思考することを目的として実施するものです。短時間で高齢者の身体状況を体験できますが、それだけで高齢者を理解することはできません。疑似体験によって感じたことを核として、体験者が十分なイマジネーションを働かせ、「もし自分が高齢者になったらこうではないか」と想像することにこの体験の意義があります。

この体験は、あくまでも高齢者の身体状況を理解するためのヒントを得るための体験と位置づけたほうがよいと考えます。

■高齢者をひとくくりに見ない

高齢者といっても一人ひとりの状態は大きく違います。全面的な介護が必要な高齢者がいる一方で、元気に一人暮らしをしている高齢者、またはほんの少しの介助を受けることで自立した生活を営むことのできる高齢者など、その状態は様々です。高齢者＝介護の必要な守るべき存在、社会的な不便や不利益やから否定的なイメージを持つことに注意しなければなりません。

■リフレクション～振り返りを重視する

ふり返りでは様々な意見・感想が出ます。その際に注意したいのは、高齢者に対する否定的な意見・感想がいけないと考えるのではなく、その感想を起点とし思考を深める。例えば、「こんなに大変なら歳はとりたくないと思った」といった自分と高齢者を対比させて否定するという意見がよく見られます。この場合「それは高齢者に失礼ですよ」ではなく、「なにがどのように大変と感じましたか？」と問いかけることで、体験者にモヤモヤした問いが残り、そのモヤモヤと向き合うことが振り返りにとっては重要です。

（参考）高齢者疑似体験指導ビデオ「高齢者疑似体験にチャレンジ！」指導解説書　高齢者疑似体験を実施する前に【埼玉大学教育学部家政教育講座助教授　河村美穂】